



名前 〔

〕

秋あきの田たのかりほの庵いおの苦とまをあらみ

わが衣手ころもは露つゆに濡ぬれつつ

天智てんじてんのう天皇

春はる過すぎて夏なつき来きにけらし白妙しろたえの

衣ころもほすてふ天ちヨウあまの香具山かぐやま

持統じとうてんのう天皇

あしやまごりびきの山鳥おの尾おのしだり尾おの

ながながし夜よをひとりかねんも寝ねむ

柿かき本人まのひと麻呂まろ

田子たごの浦うらにうち出いでて見みれば白妙しろたえの

富士ふじの高嶺たかねに雪ゆきは降ふりつつ

山部やまべ赤人あかひと

奥山おくやまに紅葉もみぢ踏ふみわけ鳴なく鹿しかの

声聞こえきく時ときぞ秋あきはかなしき

猿丸ざるまる大夫だゆう



名前 「 」

かささぎの渡せる橋におく霜の

白きを見れば夜ぞふけにける

中納言家持

天の原ふりさけ見れば春日なる

三笠の山に出でし月かも

安倍仲麻呂

わが庵は都のたつみしかぞ住む

世をうち山と人はいふなり

喜撰法師

花の色はうつりにけりないたづらに

わが身世にふるながめせし間に

小野小町

これやこの行くも帰るも別れては

知るも知らぬも逢坂の関

蝉丸